

ムスリムはなぜ東北に向かったのか

— ジャパン・イスラミック・トラストの支援活動と地域社会 —

シディキ・アキール¹、クレイシ・ハールーン²、永井 彰³、子島 進⁴

聞き手：藤原聖子⁵

震災が発生したその日のうちから、被災地に行こうと動き始めたムスリムたちが東京にいた。その決断力・実行力はどこから来ていたのか。信仰の力なのか、イスラムのイメージを良くしたかったのか。「美談」で終わらせず、彼（女）らの信仰と社会活動の関係について理解を深めるため、インタビューに赴いた。（2014年12月13日東京大塚モスクにて収録）



炊き出しに向かうJITのメンバー（2011年4月3日いわき市）
（JITのHPより転載）

- 1 シディキ（姓）アキール（名） ジャパン・イスラミック・トラスト会長
- 2 クレイシ（姓）ハールーン（名） ジャパン・イスラミック・トラスト事務局長
- 3 ながいあきら ジャパン・イスラミック・トラスト理事
- 4 ねじますすむ 東洋大学国際地域学部・教授
- 5 ふじわらさとこ 東京大学大学院人文社会系研究科・准教授

藤原 今日は、東京の大塚モスク（マシジド⁽¹⁾）を拠点とするジャパン・イスラミック・トラスト（宗教法人日本イスラム文化センター。以下JITと表記）による被災地支援活動とその後の状況について、役員の方々⁽²⁾、また、このようなイスラム系のNGOについて調査・研究をなさっている東洋大学の子島進先生にお話をうかがえることになりました。JITの活動については、宗教者災害支援連絡会⁽³⁾でもクレイシさんが2011年にご報告くださっていますし、大小のメディアでも報道されていますが、今日はとくに、みなさんの支援活動と信仰の関係、ムスリムのグループならではの苦労や利点、3.11前後での地域住民との関係の変化などを中心に聞きしていきたいと思います。

「イスラム」に対する目線

藤原 シディキさんもクレイシさんもパキスタンのご出身とのことですが、ちょうど昨日、マララさん⁽⁴⁾のノーベル平和賞授賞式がありましたね。日本ではノーベル賞を取ると国を挙げてお祝いみたいな感じになるんですけども、今回のマララさんのケースはパキスタンではどう見られているんでしょう？ いいことなのか、それとも欧米に利用されていると見られているのか。

クレイシ 金曜日の礼拝の後、誰だったか、来ていた人に、いきなり「おめでとうございます」って言われて何のことかと……（苦笑）。パキスタンでは大勢の人が喜んでるっていうのはないですね。一部ではありますけど。

シディキ アフガンがひどい状況になった歴史的な背景とか、パキスタン人は全部わかっていますから。それからちょっとマララさんをもち上げすぎちゃってる。プロのジャーナリストにまとめてもらっているのに、自伝を英語で書いたとね（笑）。



シディキ・アキール氏
(JIT／日本イスラム文化センター 会長)

パキスタン出身、1963年に留学生として来日。東京工大の機械科を卒業。72～82年はパキスタンで働くが、その後日本に戻り、貿易商に。モスク建設に尽力し、宗教法人となった日本イスラム文化センターの二代目の会長に就任。



クレイシ・ハールーン氏
(JIT／日本イスラム文化センター 事務局長)

パキスタン出身、1991年に留学生として来日。95年から、シディキ氏から声をかけられ、モスクをつくる計画に関わる。99年に、アメリカ生まれの日本人ムスリムと、モスクのお見合いで結婚。4人の子どもがいる。職業は貿易商。

クレイシ パキスタンでのタリバンの政治的などころははっきりわからないですね。私に言わせると“悪”です。だけど、タリバンが女子教育を禁止しているという報道は、正確じゃないところがあります。9.11の前に、アフガニスタンが干ばつの被害にあったことがあって、支援活動のため、私、現地入りしたことがあるんです。ビザを取るため、イスラマバードにあるタリバンの大使館に行ったんですが、大使が気さくでとてもいい方でした。それで、私、最後に思いきって聞いたんですよ。「どうして女性の教育を禁止するんですか」って。そうしたら、大使が「あなたアラビア語わかりますか、『タリバン』の意味ってわかりますか」って。「確か学生っていう意味だ」って答えたら、大使がその通りだって。「じゃあ『ハディース』では女性の教育についてどう書いてありますか」って聞かれて、『男性も女性も教育は義務である』って書かれてますよね」と言ったら、その通りだって。「私たちタリバンは学生であって、『クルアーン』と『ハディース』を実行しようとしてるグループなんだから、女性の教育を禁止するわけがないでしょう。ただ男女を分けてるだけですよ」って。だからってタリバンに納得できないところは私もいくつもありますけど、アフガニスタンではそうだったので。だからマララさんも、言ってる一部はその通りですけど、一部は西側諸国の言葉を借りてやってるんじゃないかと思いますね。

永井 でも、撃たれた時は、西側は何にも関係ないでしょ？

クレイシ ですから最初に、今のパキスタンのタリバンは、わけがわからなくなっている、と言ったんです。いろいろなニュースがあるから事実はわかりません。でもマララさんは教育のためにがんばるって言ってます。それはいいことです。

藤原 イスラムのイメージといえば、子島先生の『ムスリムNGO』⁽⁶⁾を読んでまず驚いたのは、「イスラムNGO」って言うと過激派だという誤解を与えてしまうから、「ムスリムNGO」の方が好まれるっていうと



永井 彰 氏
(JIT／日本イスラム文化センター 理事)

若い頃からイスラムに関心があったが、1970年に初めてインドネシアに渡航、その後、30歳のときに入信し、現地の女性と結婚する。その後、仕事の関係で日本に戻ったり、インドネシアに再び赴任したりしたが、イスラムの信仰を深めた契機は大きくは2つある。一つは、シディキ氏のような、信仰心篤いムスリムに、日本で出会い、影響を受けたこと。もう一つは、94年にハッジ（メッカ巡礼）に行き、イスラムの素晴らしさを再認識したことである。2005年に定年のため日本に戻り、年金生活を始めたところ、シディキ氏から、大塚モスクの金曜礼拝時の説教を日本語に訳してほしいと頼まれ、それを続けるうちに、理事に選ばれる。

ころだったんですけれども、それは世界中でそうなんですか。

子島 たとえばインドネシアだと、全然そういう感じはないようです。これがイランだと、政府が「イスラム」という看板をつけているので、NGOがイスラムを主張するのは政府との関係で微妙になったりする。逆にトルコは、政府が世俗的なスタンスをとる時期が長くつづいたので、そこで「イスラムNGO」と言うと、やはり関係が難しくなってしまう。つまり、ムスリムが多数派を占める国でも、それぞれ抱える事情はさまざままだということです。

これはインドで聞いた話ですが、同じインド国民である多数派のヒンドゥーから、イスラムの団体＝過激派というステレオタイプで、何でも



子島 進 氏
(東洋大学国際地域学部 教授)

専門は文化人類学。国際地域学の教員として、学生に、海外研修を勧めるとともに、日本のことを知り、それについて海外に伝えるための教育も行っている。3.11後はその一環として、震災の現場を英語でレポートする授業を開講し、学生とともに聞き取りを行った。その調査で、パキスタン人のカレー炊き出しの話を耳にし、JITの活動に関心をもった。JITやパキスタンの諸団体の社会奉仕活動を、2014年春に『ムスリムNGO—信仰と社会奉仕活動—』(山川出版社)として出版。

かんでも一緒にされちゃう。インドはカシミール問題を抱えていますからね。医療や教育に何十年も携わっているNGOが、テロリスト呼ばわりされる。だから「イスラムNGO」と呼ばないでくれというわけです。

9.11以降に、アメリカでイスラムという名前が付いている団体の資金を凍結して、根こそぎつぶしてしまえというような動きもあった。そんなこんなで、「我々はNGOだから、単にNGOと呼んでくれ」ということが起きるわけで、実は「ムスリムNGO」の方がいいと言っているわけでもないんです。ただ、研究を進めるときに、ここまで質量ともに大きなセクターとなったNGOについては、何らかの分類というか、議論をフォーカスすることが必要です。単純にNGOって呼んじゃうと、何を対象にしているのかわからなくなっちゃうから、「ムスリムNGO」としてみたいんです。そう呼んだからといって、彼らに対する偏見や苦しい状況が変わるわけではないことは、僕もよくわかっているつもりです。そういえば、JITはイスラミック・トラストという名称でした。

クレイシ そうすると、子島先生も過激派とつきあってるってことになっちゃって大変ですね（笑）。

子島 ここは大丈夫（笑）。日本では、そこまでイスラムが差し迫った脅威とは見なされていないし、政府がNGOに対して強権を発動することもないので、状況がだいぶ違いますね。

藤原 日本は宗教全般に対する警戒心が強いので、活動されるときもイスラムの団体ですっていうよりもパキスタン人ですって言った方が通りやすいかもしれないのに、今回はあえて宗教を出し、信仰に基づいて活動しているんだということをアピールする方向だったんでしょうか。

シディキ いや、そういう活動やってるときは、イスラムを隠すつもりもないし、イスラムを宣伝するつもりもないです。このままありのまま取ってくださいと。被災地のみなさんは、最初、不思議がってたんですよ。なんで来たんですかって。親戚がいるのかとか。最初の4カ月くらいはそういう質問がよく出ました。その時は、「私たちはムスリムで、イスラムには人を助けなさいという教えがあるからです」、と答えました。隣の人を助けることができなければムスリムではない、だからここに来るんだと。それでなんかわかってくれたみたいですね。

藤原 イスラムであったことが、むしろメリットになったことはありますか？

シディキ うーん、なんかね、誰でもよかったですよ、いてくれれば。私たち、いわき市に行って、食事をするためにラーメン屋さんに行ったんです。特別な（ハラールな）チャーハンを作ってもらってる間に話したんですけど、ラーメン屋さんが、「いや、よく来てくれるね、東京の人はひどいんですよ。私たちが東京行くと、車のナンバーを見て石を投げたりとか」って。

JITによる東日本大震災時の支援活動

3月13日 第一便が仙台に。

(おにぎり550個、インスタントラーメン、ビスケット、飲料水)

3月27日 この第八便からいわき市に。

(インスタントラーメン40入り60箱、ジュース、お米、おむつ、タオル、石鹸、衣類など)

2011年の年末までに、避難所訪問は97回に達した。

その後も支援物資輸送、炊き出しが行われた。

(子島進『ムスリムNGO』から。支援活動の事実経緯については、本書とJITのホームページに詳細がある。)

藤原 そんなことがあったんですか！

シディキ 誰かが言ってたんだけど、メディアってひどいですよって。石巻とか仙台とかばかり行って宣伝して自分の顔見せて、いわきには誰も来ない、と。私たちは困ってるのにと怒っている人がいたね。他の外国人はずいぶん日本から出ちゃったんですよ。だから、私たちが行ったことは、よかったって。

クレイシ 布教のつもりで行ってないから、宗教の話に触れないっていうことも大きかったと思うんですよ。そういうところではつつい布教の方向にいちやいますよね、みんな。それがなかったのがよかったと思うんですよ。イスラム団体ということも言わなかったし。

シディキ それは注意したね。

クレイシ もちろんお祈りの時間になればどこか角の場所見つけてお祈りくらいはしたけど。

あとは強い思い出になっているのは、本当に初めのころ、13日か14日、仙台でおにぎりを配ったんです。自衛隊が大体の地域にはいるんだけど、その地域はたまたまうちのスタッフが初めて入って。そこでおばあちゃんが涙流しながら受け取ってくれた。何も食べてなかったから。外国人が来てくれてありがとうって、それが心に残ってますね。

シディキ 同じ仙台の話だね。おにぎり配ったとき、子どもも大人も1個しかとらなかった。あれは礼儀正しかったですね。そういう時は2個も3個も取りたくなっちゃうけどそうではない。それはすごくよかったね。おにぎりなくなったら、帰ってまた次が来ますって言って。ガソリンもなかったね。

クレイシ あれは大変だったね。途中でガソリンが切れそうになって、福島あたりで。行くときはタンクで持っていったんだけど、他の困っていた人にあげちゃったんですよ。帰りの分はなんとかあると思って高速に乗ったんだけど、なくなっちゃって。福島あたりでかなり寒かったんですよ、命にも関わるくらい。なんとかしたけど。

警戒心を解いた「カレー」

子島 JITのみなさんは布教に行ったわけではなくて、単純に言うと炊き出しのカレーを作ってたわけじゃないですか。カレーって宗教的なものじゃないですよ。で、日本人はみんなカレー好きだし。だから、接点のカレーだったというのが、一つのポイント。トルコのムスリムの団体が行った時も、トルコ料理がおいしいと言って、みんなが食べてくれたそうです。外国人が、ふだんは食べない料理だけど、温かくておいしい食べ物を出してくれた。これがけっこう重要だと思います。

避難所になった中学校の校長先生に、澤井先生という方がいらっしゃるんです。JITとよく一緒に活動した方です。僕は最初、クレイシさんたちが「カレーをみんながすごく喜んで食べた」という話をしたとき、

半分くらい「本当かなあ？」と思ったんです（笑）。いや、カレーを食べたのは本当でしょうが、最初から躊躇なく食べたのかなあという疑問です。ですから、澤井先生に会った時にそのことを確認したら、「いや、最初はみんなどうしようかなって、遠巻きに見てた」と（笑）。食べようかどうしようか。でも誰かが食べて「おいしいよ」と言ったら、他の人たちも寄って来て、食べだしましたって話で。だってそうでしょう、白い民族服着た、背の高いひげのおじさんたちが何人もいるわけだから、最初はどうしたもんかなって、みなさん思ったんでしょうね。でも、結局はおいしいカレーがよかったんですよ。本場の辛いカレーじゃなくて、マイルドな味付けにしてたんだよね。

永井 その味付けの話はね、こういうことなんですよ。ここではよく夕食を出しているんです。ラマダンになると一カ月間出すでしょ。それで、たくさん作るノウハウも持ってるし、でっかい鍋もあるんですよ。で、パキスタンの人たちが食事を作るとカレーになっちゃうんですよ。しかもカレーって盛りつけが簡単で便利でしょ。だから被災地での炊き出しも、自動的にカレーになったんです。それともう一つは、ここの信者でアラブ出身の人たちには、カレーを食べたことがない、辛い物を食べ慣れてない人がいるんですよ。そういうこともあって辛さを調節して、このカレーはマイルドになったんです。

藤原 作る時には何人くらいの方が集まったんですか。

シディキ とても簡単なんですよ。

永井 あの方が作ってるんですよ、今入ってきた。

子島 ああ、ムスタファさんですね？ 彼はバングラデシュ人だけど、このモスクで働いているうちにパキスタンのウルドゥー語をおぼえたそうです。彼はあまり日本語が得意じゃないので、ウルドゥー語でインタ

ビューしました。

シディキ その人をいわき市に連れて行って1カ月、滞在させたんですよ。あとは手伝う人が2、3人くらい。100から150人くらいの食材を持っていくのに。

永井 向こうでは食材を調達できないですから、こちらから毎回持っていったんですよ。いわきにモスクが見つかって、調理に使えるってことになって向こうに材料を持ってって作るようになったんですね。

大量にご飯を作るということが日常でよくあって、というのがベースにあるからやれたんですよ。

シディキ だから今もね、500人分の食事が、ホームレスの人たちのためにほしい、と言ってこられても簡単に引き受けられる。

ネットワークという底力

永井 つまり、イスラムの団体であることのメリットというのは、お金を集めたり、お手伝いする人や食べ物を集めたり、現地のモスクを使わせてもらったり、そういうことで役立ったということでしょうか。被災地でイスラム色出すとか、そういったことは何にもないです。

子島 いわきの泉というところにモスクがあるんですよ。管理人のラジャさんがやっぱりパキスタン人で、シディキさんと会って、JITと連携



インタビューの際も、モスク名物のカレーをいただいた。マトンと野菜のカレーとレンズ豆のカレー。

して活動したわけです。ラジャさんは日本人女性と結婚して埼玉に住んでいたんですが、いわきの海や山が好きになって引っ越してきたという経歴の方です。で、そのモスクは、ここと比べてもすごく小さい。船のコンテナを転用した礼拝所とキッチンの2棟だけ。最初に行った時に、「わっ、これ以上シンプルなモスクはありえない」と思いました。ただ僕が感動したのは、あんな小さなモスクの設備でも、緊急時にフル活用すれば、人のためにすごく役に立つんだということです。なんでもかんでも準備万端整ってから支援するわけじゃない。ラジャさんにしても、いわきに住みつけてボランティアをするのは、並大抵のことじゃなかったと思いますが、気持ちがあれば、ありあわせのものを使ってすごいことができるんだということが、よくわかりました。

永井 最初はこの近所の人に手伝ってもらっておにぎりを持っていったりもしてね。近所の人にお手伝いしてもらおうノウハウっていうのはね、アフガニスタンの支援の時にモスクに古着を集めて送ったんですけども、そういう時につながりができていたので。

シディキ 声かけたら、「ああ、私たちも（支援活動を）やりたかったんだけど、何から始めればいいのかわかんなくて。教えてくれてありがとう」ってなって。後でいろいろ話したら、ある人が、「前は、中学校に行ってる娘に、『モスクの前は通らないで戻ってきなさい』とか言ってたんだけど、今はもうそんなこと思わない」、って言ってましたよ。

永井 おにぎりを握ってくれたおばちゃんがいるわけですからね。

藤原 おばちゃんっていうと、日本ではだいたい炊き出しではおばちゃんたちがおにぎりを握るんですけど、みなさんは男性が料理するんですか？

クレイシ 握る時は女性たち。カレーは男性たち。量があるからね。

藤原 今回は女性のムスリムの方たちはどう関わったんですか？

シディキ ここでいろいろ荷物が入ってくるのを分配したり、避難所行って何か欲しいものはないとか聞いてまわったり。配るのはね、女性たち。



2011年4月3日
いわき市内避難所での炊き出し
JITのHPより転載

永井 このモスクの隣に幼稚園があって、春休みだったので空いてたんですね。ですから救援物資の置き場になったんですよ。それを整理してくれたり、現地ではどういうものがあるんだろうか、あったかい下着があるんじゃないだろうかとか考えたり、支援を呼びかける文書を作ったり、そういうことは女性がやってくれた。

クレイシ 活動のレポートはほとんど女性。

永井 レポートがなければ、寄付をくださったみなさん、どうなったのか不安じゃないですか。レポートによる報告を、女性たちが確実にやったんで、活動が続いたと言えますね。HP開けばいつでも見られるようになってましたから。写真つきですからみなさん、ああこんなふうになるとわかって安心してくださる。

シディキ スリランカから電話があって、JITと書いた支援物資見ましたよって言われたこともありました。

藤原 子島先生のご本には、ムスリムじゃないボランティアの若者がみなさんのところに来て手伝ったっていう話もありましたが。

クレイシ アフガニスタンの支援をやったときから、池本さんっていうアムネスティインターナショナルの会員の人にお世話になってるんですけど、私、彼女にすぐ電話したんですよ、地震のすぐ後ね。何かできることはないか、交番ではわからないと言われたので、池本さんに、東北に行くルート探してくださいって言ったんです。で、次の日の朝、いろいろ調べたけれど方法がないって池本さんに言われて。でもその後、12日、私たちは行っちゃったんですけどね、結局。戻ってから報告したんです。池本さんに、うまく行けたっていうことを。それから池本さんが知り合いに声をかけたりして。実は神社が近くにあるんだけど、そこにちょっと苦情が出たんですよ。苦情っていうか、モスクが、外国人が、がんばってるのに、あんたたち何やってるのって。

(一同 笑)

クレイシ それで神社の人も来たんですよ。できることがあれば一緒にやりましょうと。直接じゃないけど、間に誰か入れて。光源寺っていうお寺も、なんかやりたいけど、行ったことないから経験ないからって問い合わせてきました。そうするとここで料理作ったりして、それを私たちが運んだりして。難民の活動の時いろいろお世話になったキリスト教の団体からも協力がありましたね。ちょうどメーリングリストがあったんで、そこにも流したんですよ。現地に行く人は数人ですけど。特に福島の方になると原発のこともあってなるべく若い人を避けたんですよ。リクエストは何人からもあったけど、こちらからちょっと断って。それでもフリーランサー、ジャーナリストが2、3人くらい。あとはNGOとか一般の人も3人くらい。

子島 あとは『ムスリムNGO』に出てくるブログを書いた田川さん。フリーランスのフォトグラファーですね。

クレイシ あと佐藤さんとかも行ってくれたんですよ。

永井 カレーばかりじゃなく、もうちょっと煮物とかもという話が出て、お寺の人とか池本さんのグループとかが作ってくれたり。自分たちであつちに宿を取って一回泊まり込みでお手伝いしてくれたこともあったでしょ。それからシディキさんが行った時も。子どもはスパゲティ食べたいとかハンバーグ食べたいとかいうから、用意したり。だんだんバラエティが出てきて。それからミカン農家と話がついてミカンを送ってきたり、牛乳を届けてくれたり。

シディキ やったことはすごく大きいですよ。だけど、全部私たちの力というわけじゃないんですよ。たとえば布団のセット、1セットが12,000円したんですよ。それを300セットくらいほしいと。避難所から出て仮設住宅に行くから、それが間に合わないと困るって。それでどうしようと相談してたら、たまたまJITがつながりをもっていたドバイのイスラム団体に話したところ、彼らからお金が来て、それを私たちが……

永井 でも最初はここで出したでしょ？2回目、3回目がね、向こうから来たお金でね。

シディキ もちろん。布団300セットはみんなそれですよ。私たちが少しやると別のところからもっとくるようになる。これは神の力ですよ。全部。それでできたんですよ。

永井 裏話すればね、私、ムスリム協会にも関係してるんですが、ムスリム協会の方にドバイからね、支援金を送るけど、その代わりにちゃんと報告書を出してくれてきたんですよ。それで、写真にしたときに見栄えがする布団セットがいいんじゃない、ということになって。

シディキ それはないでしょう。

永井 いや、そうなんですよ。やっぱり報告って大事なんですよ。



大塚モスク（マスジド）の建設まで

東京に「中央モスク」をつくることは、日本のムスリムの悲願だった。というのも、毎週の金曜礼拝のほか、イード（年2回の大祭）の礼拝を大勢で行うのに、専用の場所が必要だからである。ホテルでは汚すからと受けつけてくれなくなり、渋谷の宮下公園でやったこともあるが、（イスラムで不浄とされている）犬がうろつくような場所で、シディキ氏等は大きなショックを受けた。晴海や横浜のイベント会場でイードを祝ったときは、最大で1万人のムスリムが集まったが、1回の借用料で200万円かかる。その額を毎年払うくらいなら、みんなのモスクを建てよう、となったのである。

「中央モスク」は最初の計画では、八王子に建設するはずで、シディキ氏等は資金集めに奔走したが、1998年に代々木のジャーミー（トルコ系ムスリム中心のモスク）を建て直すことが決まったので、資金を譲ることにした。その後、やはり自分たちのモスクがほしいということで、大塚に物件（ビル）を見つけ、契約する。当初の持ち金は50万円だったが、協力して呼びかけ、半年で資金を調達。大塚モスクは晴れて1999年に誕生した。

通常の金曜礼拝には100名ほど、金曜と休日が重なると、200名ほど信者が集まる。イードの時は800～1000人集まり、一度に収容できないので、4回に分けて礼拝している。

現在、理事は7名で、内訳は、パキスタン人3名（内、女性1名）、日本人2名、スーダン人1名である。

シディキ それはそうだけど、報告のためにやったってわけじゃない。

永井 もちろん報告のためだけじゃなくて、ちょうど布団セットを欲しいという人がいたからうまくつながったんですよ。

「ムスリムNGO」と「ムスリムがメンバーである世俗的NGO」は違うか

藤原 だんだんわかってきたんですけど、日本は自称無宗教の人が多いので、FBO (faith-based organization) と言いますか、信仰に基づいたキリスト教の団体とか仏教の団体と言うと、無宗教の団体と明らかに違う感じがするんですけども、パキスタンでは、国民のほとんどがムスリムなのですよね。そうすると、FBOとそうではない団体との区別がないと言いますか。つまり、世俗的な団体の人もムスリムだから、なぜ被災者を助けるかという、アッラーが困っている人を助けろって言ったからという動機づけでいらっしゃるわけですよね。そうするとイスラムの旗を掲げて行く場合とあまり違わないんじゃないかって思うんですけど、今日のお話だと、イスラムの団体として活動することのメリットというのは、組織力と言うのか、ネットワーク力というのか、海外から寄付が集まりやすくなったりするんですね。

子島 パキスタンにもNGOがたくさんあって、基本的には職員もムスリムだし、活動の受益者もムスリムですけども、イスラム色を出さない団体もたくさんありますね。もともと欧米系のNGOで、パキスタンに根をおろした団体などは、宗教のことは言わないですよ。たとえば職員が一日5回礼拝する熱心な信者だったとしても、その団体が、たとえばHPで、クルアーンやハディースの章句を引用するといった形で、明確にイスラム的なメッセージを出すというわけでは必ずしもない。それは、イスラム色を出さないという話ではなくて、NGOには「参加型開発」とか、「持続可能性」とか言ったグローバルな用語があるわけですよね。それらの用語を自分たちの理念とするということは、大いにありえるわけですし、

それから、初めに言った過激派の話とも関わってきますけど、欧米や日本から資金援助を受けるときに、その方がうまく回るっていうのもあるかもしれないですね。

永井 一つはこういうことじゃないですか。こういうモスクというのは自然と信徒が集まっている場所、というだけの話なんですよ。パキスタンでなら、そこで支援活動をやるという時にね、みんなムスリムなんだからムスリムですってわざわざ宣伝しないですよ。それはここに来ているパキスタンの人たちも同じで、私も含めて、ムスリムですから、なんて意識は別にないですよ。パキスタンでやってることと同じで、「困っている人がいるよ、だから助けよう」となっただけ。パキスタンで「ムスリムだから支援やってます」って言わないもの。だからここでも言わない。そんな程度のことだと思います。

シディキ ただね、私たちがイスラムの名前を出してやってたから、海外のムスリムが寄付をしてきたというところもあるよね。

子島 ムスリムが、信頼できるムスリムがやってる支援活動にお金を出したいっていうのは、自然ですからね。

ところで、いわきで「パキスタン人を助けるために来たんですか」とシディキさんたちは何回も聞かれて、「違う、人類はみな平等。アッラーは困っている人は助けなさいと言っている。だから来たんだ」と『ムスリムNGO』で書いたんですね。その話を聞いた時に、最初は「人類」を持ち出したのは、ここが日本だからかなと僕は思ったんです。「人類みな平等」って、日本人にもわかりやすいから。

だけど、その後でもう一回パキスタンに行って、小さなNGOを回って気がついたんですね。彼らは地元のコミュニティで活動していて、外国はおろか、パキスタンの他の州で活動することもないはずですが、やっぱり「人類のために」って掲げてる。なんでかなって思った時に、クルアーンの「一人を助けるってことは、全人類を助けることだ」って

という一節、これはイスラム系のNGOのHPによく掲載されている、とても有名な章句ですが、それにハタと思い当った。ああ、シディキさんが言っていたのは、これなんだ。日本での方便じゃなくて、本国パキスタンでもそうだったと。

それ以前のパキスタンでの調査でも目にしていたはずなんですけど、その標語を見ても意味がよくわからなかったんですね。それが東日本大震災でのJITを経由して、ようやくのみこめた。リソースも少なく、コミュニティの中でちょっと学校やったりとか、クリニックやったりしている団体ができることは、おのずと限られてますよね。それが「人類のために」って言うのは、大風呂敷を広げてるんじゃないかと、一人を助けることが全人類を助けるっていうクルアーンの教えを、理念として掲げているんだなあ実感できた。シディキさんの説明も、そういうことなんだと、ようやくわかった。

イスラムの復興現象を理解しようとするときに、こういう社会経済的な原因があるとか、政治的な背景があるとかって説明、よくしますよね。でもそうやって説明していくと、宗教としてのイスラムの中身が何もなくなっちゃうってことに、僕はすごく違和感を持ってたんですね。じゃあ、どう理解したらいいんだろうかっていう時に、「報奨」とか、今のクルアーンの一節のような、宗教的なキーワードからインスピレーションを得て、人が動くみたいなのところに気がついて。ただ、それをあまり強調すると、ムスリムは“宗教が服を着て歩いている”みたいな人ばかりって、これもまた現実とはかけ離れてしまう。でも、今回はそれでちょっと捕まえられたかなっていう感じがしています。

もちろん、章句を読んで、みんながみんな即行動なんてわけじゃなくて、そこからどんなインスピレーションを受けるのか、どう解釈して、どんな行動に移していくのかは、それぞれのムスリムの置かれた状況や価値観が反映してくるわけですよ。それから、今回のケースで言うと、「カレーがおいしかった」というのが、JITと被災者の接点として大きかったと思うんですね。動機が宗教的でも、手段として有効なものが宗教的とは限らない。

信仰と支援活動の関係

藤原 その「全人類のために」とフレーズも、その言葉だけ切り取ってみれば、ムスリムの活動家と、世俗的な日本人の接点になるんでしょうけれども、日本人がひっかかるのは、出典が『クルアーン』だということより、それを守ると神からの報奨があるというのが真の動機なのかどうかというところかもしれません。つまり、ムスリムの方々は、死後の世界を信じていらっしゃると思いますが、どうして困った人を助けるのかっていうと、そのこと自体もちろん重要だけど、それだけじゃなく、人助けをするとアッラーが報いてくださる、天国に行けると思っているのも励みになるようですね。でも、そうすると、結局自分のためにやってるんじゃないかって、本当に人のためにやってるわけじゃなくて自分が天国に行きたいから人を助けてるんだって言われてしまいませんか。

永井 そうです。少なくとも私の中では人のため、っていうのは一つもありません。どんなに親切にしてもその人のためにはやっていない。全部自分のためです。自分の気持ちがおさまるためです。そうしないではいけないというだけです。そんな人のためなんていうのは私からみれば存在しない。全部自分のためです。

藤原 活字にすると誤解を受けそうですが、対面してお話をうかがっている限りでは、永井さんのそのきっぱりさは、自己中心的というより、裏表のない、誠実で謙虚なお人柄が表れている感じがします。クレイシさんはいかがですか。

クレイシ 私に言わせると、結果的には自分のためになってるけど、他の人のためですね。やっぱり困ってる人を見たら、手伝ってあげたいという気持ちに自然になりますね。結果的には自分のため、アッラーから報奨をもらえれば、自分のためになりますけど。

永井 私の場合は日本人ですから、アッラーがそういう風にやると褒美をくれるということよりも自分の気持ちがおさまるから。そうしないではいられない。情けないかな、アッラーのことまで気がつかないでいるってというのが本音ですね。

シディキ そこは難しい話になっちゃったけど、私は実は自己中心で、自分のことで精いっぱいですよ。震災の時にすぐに支援に行けたのも、リーマンショックのあと、仕事がうまくいっていなかった、何もやることがなかった、というのがあります。

ただね、全体的にやっぱりアッラーということは頭にあるんですよ。「これやらなきゃいけないのはなぜ？」っていうと、『クルアーン』『ハディース』にこう書いてあると。人にお金あげるとアッラーが10倍くらい返してくれるんですよ。これ真実なんです。それすごくいいことなんです。10倍という数は関係ないかもしれないけど、とにかく自分のやったことは絶対に返ってくる。その上にプラス、死んだら天国に行けると。しなかったら倍になって地獄に行く可能性だってでてくるわけ。だから自分を守るという形でね。

神様が私を自由にさせてくれた、それで私は何でもできるようになったんだから、じゃあ何をしたんだと、死んだあと、絶対に聞かれる。その時にどう返事すればいいかと。それが頭にあるんですよ、いつも。怖いんですよ。わかりますか？

クレイシ まあ、私の経験では、アッラーと人助けは、自然につながるようになりますね。私、子どもが4人いるんですが、住んでるところのすぐ横に公園があるんですよ。そこにいるホームレスの人に食事を持っていくとき、わざと子どもを行かせるんですよ。家内が、料理を作る時にちょっと多めに作って。その時はアッラーの教えにこういうことがあってと教えてますから、たぶん子どもの頭の中でもそれが自然なことになっていくと思うんです。私が子どものころも、私の父は、礼拝のためにモスクに行くと、帰りに誰か困っている人を連れてきたんですよ。

で、母に食事作ってくれって言う。それを見てきている。だから私も自然にそうなります。

もうひとつ、ちょっと話がずれますけど、地震の後ですね、手伝いに行くって話になった時に、四男が赤ちゃんですから、余震もありましたし、家内が本当に行くのって、悲しそうな顔をして聞くんですね。私も正直非常に複雑な気持ちだったんですよ。子どもを置いていくのも悲しいですし、行けばまた津波が来るかもしれない、そういうことを頭の中で予想しながら、でも行かないとだめだっていう気持ちがあって。その時急に、私が思い出したのが「ジハード」の言葉だったんです。「ジハード」の意味は「努力」^⑥なんですけどね、今こそ、ジハードすべきだっていうこと。それで私の心の中の葛藤が終わったんですよ。それを家内にも話したら家内もすぐに納得してくれて。でもそれなりに、私たちのことも考えて行ってねとは言われたけれども、教えは力になりますよね、そういう時は。

シディキ なかなかね、信仰がない人には理解が難しいと思うけれども、私は来世はあると信じている。もし私が天国に行って、隣の人が地獄に行くとしたら、とても悲しいよね。(シディキ氏、泣き始める。)日本人はみんなね、すごく良い人なの。だからみんな天国行ってほしい。自分が燃えないようにしてほしいの。信じれば、簡単なの。(「皆で死後に安らぎと楽園を求めよう」というメッセージカードをさしだす。)年とるとね、涙もろくなっちゃってね、ごめんね。

天国には誰が行くのか

藤原 おっしゃったことはすごくよくわかります。日本の宗教界で、社会貢献活動をしている人たちが今、悩んでいることの一つは、宗教者ならではの支援活動はあるのかということです。つまり、食べ物や毛布を渡すこと以外に、宗教者の役割はないのか、という。それで、「臨床宗教師」^⑦のように、相手の宗派を問わず、心のケアをすることに、宗教者

の可能性を見いだそうとしている人たちもいるのですが、イスラムの場合は、来世観が明確なので、ムスリムの方が、ムスリム以外の人の内面に寄りそうというのは難しいのでしょうか。そこに踏み込むと、亡くなった方が、天国に行っているかどうかが問題になってしまいそうなので。

シディキ いや、天国はみんな行くんですよ。

藤原 何教徒でも良いことをしていれば天国に行けると？

シディキ そう。そこがベース。神に逆らわなければいいんですよ。そう私は言いきる。他の人はどう言うか、わからないけどね。

ムスリムにならなくてもいいんだけど、神様がいるのは現実。だから、みんな、死んだら絶対に神様のところに行く。その時に、生きていたときに何をしましたか、って聞かれる。だから、人を助けるとか、神様が喜ぶことをして、自分の体だけは守ってください。燃やされないようにしてください。

クレイシ 『ハディース』ではね、「この人は悪い人だから地獄に落ちる」、または「信じてないから地獄に落ちる」、とは言っちゃいけないことになっているんです。それは神様が決めることです。自分についても、私はいいことをやってきて神様を信じてるから絶対に天国に行けるとは言えないんです。ですから、この人は神様を信じてないから地獄に落ちるとか絶対言っちゃいけないんですよ。私は日本人がみな地獄に落ちるとは思っていないし、ムスリムの仲間、いえ、自分さえ絶対天国に行けるかどうかはわからないんです。

シディキ 宗教の話になっちゃいますけど、説明のために言うと、『ハディース』によると、ある人がすごくいいことをしてる。イスラムに全部従ってる、絶対に天国に行ける、手を伸ばせば行けるって時に、何か問題を起こして、逆戻りして地獄行っちゃう。それに対して、ある人はず

っと悪いことをしてた。でも、地獄に入る直前にいいことをして、地獄を免れた。これはどっちがいいのか、すごく複雑なんですけども、結局、人間にはわからないんです。だからね、いつもみんなに言うんだけど、自然に生きていて、悪いことしないのであれば、いつか天国に行く方法が出てくる。昔は、ムスリムじゃないと地獄に行くのかとか聞かれたよ。イスラムの先生たち^⑧もいつもそれで困るんですよね、答えるのに。だけど、私は、その答えができるようになった。みなさん天国行ける！

クレイシ 教えを否定するのはその人の自由ですけど、否定しない人はね。

永井 芸能人の葬儀だとかお別れ会の時に代表が挨拶するじゃないですか。必ずね、「天国」って言うんですよ。何なんですか、日本人が天国って言う根拠って何なんでしょうね。絶対言うよ？

シディキ 何それ？

永井 必ず「今あなたは天国で、前に死んだ奥さんと会っていて」とか、「我々も後を追いかけて行くから」とか言うんですよ。必ず「天国」って言うんですよ。

シディキ これと全く同じことを私たちも言うね。お墓に入っている人に対して「私たちも近いうちに行きますよ」って。

永井 そうなんだけど、日本人ってちゃんとそれを教えられてないんだけど、みんな言ってね。おれはそんなこと関係ないって席を立てて帰った人っていないんだよね。

クレイシ 地獄を信じてないからじゃないですか？

永井 いや、そうでもないでしょう。なんかそれが当たり前になっちゃって。つまり私が言いたいのは、日本人って無宗教なわけじゃなくて、「宗教だ」という意識がないほど、どっぷり宗教に浸かっているんですよ。

シディキ いい方に考えれば、みんなの心の中に神様がそういう望みを作ってるのかもしれないね。望めばかなえてくれるし。

永井 それともう一つ、自衛艦の中には神棚ありますよね。やっぱり危険な業務に携わるものにはあるんでしょうね。それから哨戒機にもありますよ。それからどうも警察庁にもあるらしい。パトカーを買うとお祓いするらしいよ。ただしこれはね、あなた調べてくださいよ。お祓いに行く時の運転手は誰がやってるのか、ガソリン代は誰が払ってるのか。憲法違反ですよ。これ、もし公費を使ったらね。

「宗教」を素通りする日本人―「恩を返す」という理解でいいのか？―

子島 『ムスリムNGO』を書いているときに、参考に外務省だったかJICAだったかのHPを読んでいて、興味深い表現を見つけました。いろんな国がね、震災の時に来て、支援してくれました。百を超える国から支援が届いたんです。すごいですよね。では、なぜ来てくれたのか。それは今まで日本がODAで一生懸命他の国を支援してきたので、「恩返し」に来てくれた。そして、日本はがんばって復興して、今回の支援の恩返しをしなくてはならないという趣旨です。そのHPが言わんとするところは、よくわかるんです。日本人としては、これで理解した気になれる。でも、「本当に、恩返しで理解していいのかなあ」と思いました。だって「恩返し」って、すごく日本的なコンセプトですよ。

永井 いや、そうかなあ。

子島 そうだと僕は思うんですよ。『菊と刀』は日本人論の原点と言ってもいいと思うんですが、そこでも恩が主要テーマです。戦後すぐに出版された『菊と刀』はたしかに昔の本ですが、恩返しという考え方は決して古びていない。僕はJITの調査とは別に、いわきで被災者からの聞き取りと、冊子にまとめられた130名の手記の英語への翻訳を学生と行っているんですが、「恩返し」がよく出てくるんですね。今回は助けてもらったから、今度どこかで災害があったら恩返ししたい。

で、僕は「報奨」と「恩返し」は違うと思ってるんです。だって、恩返して間に神様が入らない、人と人との関係ですよ。

永井 ただね、トルコとのつながりを見るならば、どうも恩返しっていう感覚って彼らにはあったんじゃないかなっていう気はしますよ。

それから、昨日詳しく話を聞いたんだけど、アフガニスタンの難民支援をやった時に、古着の送料をみなさん余分にくださったので、学校の支援も行ったんです。そうしたら、今回、我々が支援した学校の人たちがたぶん集めたお金だと思うんですけど、何百万っていうお金を送ってきたっていうんですよ、震災の支援のために。これ、恩返しという言葉で共通に言えるんじゃないですか。日本では恩返しというのは非常に重要な言葉になってるけど、彼らにはそれほど重要な言葉じゃないかもしれないけど、感情としては同じなんじゃないかなと思うんですよ。

子島 たしかに、トルコと日本の間には、明治時代のエルトゥールル号の遭難以来、助けたり、助けられたりという歴史的な関係があって、「恩返しの物語」ができあがっているんじゃないかな。それから、恩返しにある程度の普遍性があるというのも、そのとおりだと思うんです。人間ですから、基本的に共通している部分はあるわけで、違いしかなかったら、お互いに理解不可能になっちゃう。

ただ、「助けてもらったら、なにがなんでもその恩を返さないといけない」とか、場合によっては「恩を返せそうになかったら、助けてもらうことさえ躊躇してしまう」といった、なんて言うのかな、強迫観念に近

いレベルで、他の国の人が「恩返し」を重視しているのかどうか。それと、一度恩を受けたら、何が何でもがんばって返してくれるというのは、たしかに頼りになるけど、一方で、今までの関係の中で恩は作られるわけで、これまでまったく関係のなかった人を助けるっていう動機づけには、なかなかならないんじゃないかということですね。一方のイスラムでは、「困っている人を助けなさい。その報いは必ずある」っていう時、神との関係が一番に来る。だから、その困っている人を知っているかどうかは、それほど大きな問題にはならないと思うんですね。

そう考えると、グローバル化が進んで、今まで関係のなかった見ず知らずの人と相互に支援することが多くなってくるわけですから、日本人は「恩返し」のバージョンアップを図る必要がありますよね（笑）。

クレイシ 恩返しについては『ハディース』にも書かれていますけどね、言葉にはしないですね。恩返しだからやるっていう、そういう文化はないですね。

子島 日本ではやらないと「恩知らず」になってしまうから。

永井 そういうのが文化で重要な要素になってる。ただね、あれですよ、亡くなった友達の家族を大事にしなさいとかそういうのはイスラムにもあるんです。要するに、全く知らない人じゃなく知ってる人から助けなさい、それから自分の家族から助けなさいっていうんですよ。われわれの教えは、家族をほっといて他人を救済するなんてことは言わないですよ。

3. 11後の変化—公的な場での宗教の可視化—

藤原 これだけの支援活動をされたということで、震災の後は、やはりこの地域ではイスラムに対するイメージはアップしました？

永井 うーん、イメージアップしたかな？

クレイシ もともとこの地域では、特別仲いいとか悪いってことはなかったです。モスクにするためにビルを買った時にも反対があったわけではないので。でも、9.11の時はかなりイメージが悪くなったと思うんですね。私はその当時赤羽に住んでましたが、もう少し近くに引っ越したいってということで、大家さんに、ちゃんと契約して礼金敷金も払って日本人の保証人つけて借りたいって話したら、お前たちどれくらい武器隠してるかわからないってことで断られたんですね(笑)。そういうイメージあると思うんです。

だけでも、一橋大学の学生たちがそれについて取材したんですよ、私たちに言わずに。その取材をNHKが取り上げた番組があるんですよ。その番組では、隣の何軒かのインタビューでみんな、このあたりのムスリムはいい人だって言ってくれていて、一人も悪く言ってないんですね。

シディキ それはあったかもしれないけど、もうひとつ言えるのはね。日本は外国と比べると、ずっとよかったわけですよ。偏見の目で見ないとか暴動起こさないとか、これは感謝してます。

藤原 最近では日本でもヘイトスピーチが問題化していますが、その影響は感じられますか？

クレイシ むしろ最近ではハラールとかムスリムフレンドリーとか、わりといいですよ。ですから同じ大家さんがね、空き家があるから、誰かいれば紹介してくださいって、そんな風に言ってきたり。それは、炊き出しの活動に参加して、初めてモスクに入ってみて、武器がないってことを自分の目で確かめたってことですね。

私たちも、自分たちでは踊ったりしませんが、地域の阿波踊りのお祭り、桜祭りでは、毎年カレーの屋台を出して、地域の人たちとの交流を大事にしていますよ。

藤原 公的な立場にある人が、震災をきっかけにみなさんと親しくなった、というようなことはありますか？

クレイシ 一人、文京区の議員さん⁽⁹⁾が来て、みなさんががんばってるから、自分もできることないかって。で、その議員さんは、光源寺さんが何か作ると、ドライバーとして車で運んでくれたんです。3日間やってくれたんですよね。その後、一緒に被災地にも行ったんですよ、3日間そこに泊まり込んで。その後、彼は選挙があつて、選挙の時その話をしたんですよ。こういう活動やったって。横のアドバイザーがね、イスラムのこと、モスクのことは、あまり出さない方がいいって言ったらしいんですよ。でも、議員さんから電話があつたんですけど、あなたたちは素晴らしいことやったから、私は隠さないで言うよって。私も心配してたんですけど、当選しましたね。

シディキ 私にとってはね、いわき市のほうだけど、澤井先生がすごく協力してくださったっていうのが大きかった。校長先生が全部情報、ここは炊き出しが必要だとか、ここはちょっと話したほうがいいとか、アドバイスしてくれたからうまくいったんです。

クレイシ あったかく歓迎してくれましたからね、最初から。

子島 澤井先生は、さっきも一度話題にしましたが、素晴らしい人なんです。いわきのラジャさんと支援活動を一緒にやったわけですが、ラジャさんが「息子を、ぜひ澤井先生の学校に入れたい」ということになって、ちょっと遠かったけど入学することになった。澤井先生の学校では、この息子さんの入学式のときに、なんと「君が代」とパキスタン国歌を両方演奏しているんです。僕は、てっきりテープを流したと思ったんですが、そうじゃなかった。事前に生徒に指導して、覚えさせて、生演奏してるんですね。まあ、生徒さんは大変だったでしょうが、澤井先生はパキスタン人の支援活動を、それほど高く評価していたわけです。国歌

を演奏するに値するんだと、保護者にもちゃんと説明して、それでみなさん納得されたそうです。パキスタン大使館からも、この入学式に人を送ったと聞いています。

クレイシ その澤井先生の妹さんが文京区の大塚小学校の副校長だって、最近わかったんですよ。

子島 すごい偶然ですね！

クレイシ 私の子どもが2人そこに通ってまして、小さい子どもはお祈りは義務じゃないから、それまでやらせてなかったんだけど、いきなり子どもたちがお祈りを学校でしたいと言いだして、先生に話してくれて。それで私が話をしに行ったら、校長先生の反応はあまりよくなかったんですね。でも、横で話を聞いてた副校長先生が、後で、がんばってまた言うてみてくださいとか、教育委員会の話とか教えてくれたりして。今は階段のところの場所をもらって、子どもたちはお祈りができるようになったんです。

永井 それとね、管轄の巣鴨警察署がとても私たちに優しくなりましたよ。震災の支援活動と関係があるのか、証明はできませんが、少し彼らの間でイスラムへの理解が深まったんじゃないかっていう気がしています。

クレイシ 全然変わりましたよ。9.11の後もそうだけれども、イギリスで地下鉄の事件があったでしょ。あの時は、3日間、うちの家の周りを公安がうろうろして、車も置いてあって。私も我慢できなくて怒鳴ったんですよ。何探してるのかって、質問があれば聞いてくれて。それでいなくなった。ところが、このまえ（2013年）アルジェリアで事件があったでしょ、その時ね、わざわざ巣鴨警察署が来たんですよ。こういうことが起きたけれども、一般のムスリムは関係ないってことは、私たち

もわかってるからってわざわざ言いに来た。だいぶ変わったって思いましたね。

どこの国も、パキスタンも最近そうになってきましたけど、メディアの力って大きいんですよ。今まで西側諸国のメディアの影響で一般の日本人がイスラムに偏見をもっていたとすれば、それは仕方がないんですけど。偏った報道をしない普通のメディアになってほしいと思いますし、一般の人は近くにモスクがあって、ムスリムとふれあうチャンスがあれば、たぶんもうちょっと理解してもらえるとと思いますね。

藤原 メディアといえば、ここしばらく、イスラム国の報道が多かったですね。イスラムでは、日本人からみたら理不尽な教えでも、盲信してしまう、周りが見えていない、というイメージが、イスラム国報道でまた強くなったかもしれません。でも、今日のインタビューでは、それとは全く違うムスリムの人たちの姿が見えてきたように思います。

シディキさんもクレイシさんも永井さんも、強い信仰をお持ちですが、イスラムの信仰を持つというのは、伝統的な教えや戒律に自動的にしたがうロボットになることではなく、要所要所で、自分で考えた末、意志決定しているのだというのが具体的によくわかりました。それも三者三様で、生まれながらに信者であるパキスタン出身のお二人と、成人してから改宗した日本人の永井さんの間でも違いますし、また、お年を召したお二人は、もう、表も裏もまるっと見てください、という話し方。お若いクレイシさんは、日本人にありがちな受け取り方を想定しながら、慎重に話しているという印象を受けました。そして、子島先生が、パキスタンのムスリムNGOとの比較をしてくださったことにより、私たちもより正確な理解ができました。

つまり、3.11で、みなさんの活動を見たり聞いたりして感動した人たちの間で、「ムスリムにも、いい人たちがこんなにいるんだ」という転換が起きたのだとすれば、そこからさらに、次の段階として「いいムスリムにも、いろいろな考えの人がいるんだ」というように理解が進んでいくことが必要で。そこに至ってやっと、単純なステレオタイプが解消さ

れ、ムスリムNGOの活動も日本社会により広く深く受容されていくんだらうと思います。

ちょうどアザーンが始まりましたので、お祈りのお邪魔をしないよう、このあたりで。今日はどうもありがとうございました。

後日談

JITは池袋でホームレス支援活動を定期的に行っている。このインタビューの2週間後にも、東池袋中央公園でカレーの炊き出しが行われた。クレイシさんが全体の監督、みなさん慣れた手つきで手際よく配膳をし、クレイシさんの息子さんもお手伝いをしていた。

ところがその翌日、取材に来ていた朝日新聞の記者がまとめた記事「ホームレスにあったか支援」（朝日新聞東京版朝刊 12月28日）を読むと、日本人のNPOのことばかりで、大塚モスクにも、JITにも一言も言及がない。500人分のカレーやチャイとデザートを提供したというのに。

震災後のJITの支援活動については、読売新聞、東京新聞、日経ビジネスオンラインなど、大手マスコミも度々報道しているので、新聞でのムスリムNGOへの言及がタブーになっているということはない。「イスラム」の語を、記者が故意に外したのでなければ、カレーは、近くのインド料理店に、支援団体がケータリングを注文したんだなどと思いきんだのだろうか。それだけ、JITの活動が、周囲に溶け込んでいるという証でもあるのかもしれないが。それにしても、クレイシさんは掲載された写真にも写っておらず、陰徳を積み過ぎ、と思った年末だった。

注

-
- (1) 「マスジド」はアラビア語で「モスク」を意味する。
 - (2) なお、これらの役員の方々は、ウラマーのような特別な宗教的指導者ではなく、日本的に言えば、在家信者である（イスラムではもともと、一般信者から区別されるような聖職者を設けない）。
 - (3) 2011年4月1日に発足した、宗教者による被災者支援の情報を交換し、その活

動を拡充するための組織。

<https://sites.google.com/site/syuenrenindex/>

- (4) マララ・ユスフザイさん（1997～）。2012年10月、スクールバスで下校中、**TPP**（パキスタン・タリバーン運動）の武装勢力に襲撃され、重傷を負った。犯行理由は、教育権を求める、反イスラム的女性への報復だった。マララさんは女性が教育を受ける権利を訴え続け、2014年、ノーベル平和賞を受賞した。
- (5) 子島進『ムスリムNGO—信仰と社会奉仕活動—』山川出版社、2014年。
- (6) しばしば「聖戦」と訳される「ジハード」は、アラビア語では「(神のために)奮闘努力する」がもとの意味。
- (7) 臨床宗教師とは、終末期患者や被災者に対し、宗教的な立場から心のケアを行う人（チャプレン）で、2012年に養成講座が東北大学に設立された。
- (8) 大塚モスクには、金曜礼拝時などに、学識あるイスラムの指導者たちが度々訪れる。
- (9) 当時はまだ議員ではなく、この後、初当選する、浅田保雄氏。